

藤村全集

第十三卷

筑摩書房版

藤村全集第十三卷

昭和四十二年九月十日發行

著者 島崎藤村

發行者 竹之内靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
株式會社 筑摩書房

電話 東京四一七六五一（代表）
振替口座 東京四一二三番

第十三卷 目次

市井にありて

いろはがらた	五	『蠅』	六
朝夕	八	花袋君を訪ふ	六
言葉の術	八	著作と出版	七
民話	七	虚心坦懐	七
近江の商人	六	熱情と愛	九
鯉を放つ	九	深刻ではあつても残酷ではない	八
草の言葉	三	青春の薔薇	三
消息	三	精神の流浪	五
夜咄	三	朝顔といふ花	六
枕のもと	四	磁石は常に南を指す	六
身のまはりのこと	四	批評について	三
小諸のおもひで	四	新釋	四
芥川龍之介君のこと	五	『冬菜』の作者に	六

桃の雫

美しい心	六	小山喜代野夫人碑銘	一六
生き残るもののため	一〇〇	桃	一六
故樋口一葉	一〇一	短夜の頃	一三〇
近江の自然	一〇三	一茶の俳句より	一三三
明治文學の出發點	一〇三	夢	一三五
『文學界』のこと	一〇四	相生	一三七
『若菜集』時代	一〇八	寄席	一三九
三つの長篇を書いた當時のこと	一二三	生を養ふ	一四〇
折にふれて	一三〇	ある日の對話	一四〇
同じく	一三三	飯倉附近	一四〇
寝ごと	一三三	附記	一六
千曲川の旅情	一三四		
六十歳を迎へて	一五	大きな言葉と小さな言葉	一六
路	一五	昭和六年のはじめに	一五
生一本	一六	寢物語	一六

同 顧	九四	破 屋	二五
第三の眼	一〇一	文章を學ぶものために	二五
交通の變革が持ち來すもの	一〇二	夜 咄	二五
町人蜂谷源十郎の覺書	一〇四	老 子	二六
笑	一二一	パスカル	二五
ごめん下さい	一二七	杜子美	二六
餞の言葉	一二八	芭 蕉	二六
東 歌	一三〇	本居宣長	二六
澤木梢君のおもひで	一三二	トルストイ	二七
『根岸の鶯』	一三六	チエホフ	二六
秋 草	一三九	バルザック	二六
このごろの日課	一四二	ゾ ラ	二七
小半日	一四四	岡倉覺三	二七
伊香保土産	一四九	鷗外漁史	二七
京都日記	一四四	シェークスピア	二七
力 餅	一四八	應援の辭	二七
三義鳩の記	一五二	世界文藝大辭典	二七
煙 草	一五四	愛兒讀本	二八

文壇出世作全集	二七九
木の實、草の實	二八一
著作者としての自分の出發	二八三
二つの像	二八六
婦人の笑顔	二八七
TERRE	二八八
覺書	二八九
晝寢	二九五

ある人へ	二九〇
雪の障子	二九〇
紫の一もと	二九二
人工の翼	二九三
歴史と傳説と實相	二九四
牧野信一君の『文學的自敘傳』	二九七
好き距離	二九〇
日本海と太平洋	二九〇

拾遺

飯倉時代後期	三三五
『夜明け前』を出すについて	三三五
小山内薫君	三三五
鷗外漁史	三三六
牧水全集をすゝむ	三三六
お答（昭和四年に發表せる創作・評論）への 回答）	三三八

『千夜一夜』	三三九
名寶展一瞥	三三九
「田山花袋との最後の對面」	三三二
花袋君の藝術	三三二
机上の銷夏法	三三三
序の言葉（務臺四郎編『藤村少年讀本』）	三三三
北村透谷を憶ふ言葉（文豪遺墨展に寄す）	三三四

文豪遺墨展の印象	三三	松本女子職業學校校歌	三六
序の言葉（菊池重三郎著『歐羅巴物語』）	三六	西丸小園のために（西丸小園畫會の推薦文）	三五
「印象に残つた人と仕事」への回答	三七	序のことば（田山花袋著『百夜』）	三五
「昭和五年に發表せる創作・評論に就て」	三七	ゲーテ全集を薦むるの辭	三五
への回答	三七	『夜明け前』成る	三五
寢物語	三七	祝の言葉	三五
田村榮太郎氏が「夜明け前」の史的考察に	三七	日本ペン俱樂部の設立に就いて	三五
接して	三八	日本ペン俱樂部發會席上にて	三七
田山君の墓前で	三八	北村透谷（『世界文藝大辭典』索引）	三六
自分一個としては見合せを希望す（國定教科	三八	雛祭を迎へて	三六
書に實施されんと聞く假名遣改定案に就て）	三八	「我家」を設計	三六
飯倉より	三八	「苦しい餘生」	三六
故園の心	三八	小さな聲	三六
小山敬三君の製作（小山敬三滯歐作個展カタログ	三八	木村熊二翁の遺稿	三五
グ序文）	三八	學院の若き日	三八
寢物語	三八	トルストイ全集に寄す	三七
序のことば（山崎斌著『日本固有草木染色譜』）	三八	竹久君遺作展覽會の開催をよろこびて	三七
新春を語る	三八	田山花袋全集に寄す	三七

「獨歩の記念碑」……………三七四

初 拾（飯倉だより）……………三七四

「南米遍路の設計」（花を蒔き歌碑を建てゝ巡る、

「谷底の家」と永久訣別）……………三七五

「愛用の文机」（感深し「夜明け前」の頃）……………三七六

何頼遺稿のはじに（小林郊人著『蛛栖何頼』序）……………三七六

所 感……………三七七

國際ペン大會への渡航時……………三七七

南方通信を寄するとして……………三七七

「秋聲全集」刊行の辭……………三七八

リオデジャネイロにて……………三七八

「ペン・クラブ大會」……………三七九

船窓より……………三〇〇

船窓より……………三〇一

赤道を越えて……………三〇二

「日本招致も有望」……………三〇三

喜望峰にて……………三〇四

南大西洋に出で、……………三〇五

「明月の詩感を贈る」……………三〇七

南米に使せし日（一）……………三〇八

南米に使せし日（二）……………三〇九

南米に使せし日（三）……………三〇九

大統領選舉戰の印象……………三一一

紐育の宿舎にて……………三二三

大西洋を越えて（歐羅巴通信）……………三二四

魏町、大磯時代……………三二五

國際ペン・クラブ大會より歸國の際の談話……………三二五

第十四回國際ペン大會報告……………三二六

第十四回國際ペン俱樂部大會に於ける演説……………三二四

日本近代文學の發展について……………三二五

最も日本的なるもの……………三二六

「旅窓の信州人」……………三二〇

開會の挨拶（物故作家慰靈祭記念講演會）……………三二五

南米その他の旅より歸りて……………三二七

新藝術院に關する談話	四六	「明治學院舊總理井深梶之助に關する言葉」	四六
藝術院のこと（私の辭退したわけ）	四六	序のことば（岡田八千代著『若き日の小山内薫』）	四六
仙臺の二日	四六	水上瀧太郎君の著作	四六
「國語に對する山本有三氏の意見について」への回答	四六	木曾の山里	四六
土	四六	序（『西洋文學選』）	四六
ある人々に	四六	親鳥の愛	四六
師走の日	四二	「西洋文學選」あとがき	四九
新春を迎へて	四三	昭和十六年を迎へて	四六
すなほな心（『模範綴方全集』序のことば）	四四	回顧（父を追想して書いた國學上の私見）	四六
刊行の辭（『新日本少年少女文庫』）	四五	慰問袋	四七
學院時代の戸川秋骨君	四五	夜咄	四七
序の言葉（金素雲著『乳色の雲』）	四七	國語問題覺書	四八
「深雪の下の縁こそ」	四七	武林君とゾラの翻譯	四九
師走の日	四八	羽衣櫛	四九
小半日	四八	「千曲川のスケッチ」筋書（劇映畫のためのストオリイ）	四九
雪の障子	四八	序（山崎斌編『藤村の歩める道』）	四九
母國の春	四八	少年少女におくる言葉	四九

耳を洗ふ（序に代へてある人に與ふる手紙）……………	四九	心心見春草……………	五〇
序のことば（高橋新吉著『神社參拜』）……………	五二	栗本鋤雲の遺稿（鋤雲翁四十六回忌に）……………	五五
大會への希望……………	五二		

解題……………	五九
---------	----

市井にありて

“The struggle for freedom is to be sure nothing but the perpetual living appropriation of the idea of freedom. He who possesses freedom otherwise than as something for which he is striving, has a dead, soulless possession; for the idea of freedom bears what within itself which causes it to broaden and expand under appropriation, and if any one, during the struggle for its attainment, pauses and cries, Now, I have it,—he proves thereby that he has lost it.”

Henrik Ibsen

いろはがるた

長いこと自分は民話を書くことを思ひ立つて、未だにそれを果さずにゐるが、このいろはがるたもそんな心持から作つて見た。私の『ふるさと』や、『をさなものがたり』は、形こそ童話であるが、その心持は民話に近いやうに、子供のために作つたこのいろはがるたも矢張それに近い。

い 犬も道を知る。
ろ 櫓は深い水、棹は浅い水。
は 鼻から提灯。
に 鶏のおはやうも三度。
ほ 星まで高く飛べ。
へ 臍も身のうち。
と 虎の皮自慢。
ち ちひさい時からあるものは、

市井にありて

大きくなつてもある。

り 林檎に目鼻。

ぬ 沼に住む鯰、沼に遊ぶ鯰。

る 瑠璃や駒鳥をきけば父母がこひしい。

を 丘のやうに古い。

わ わからずやにつける薬はないか。

か 賢い鳥は、黒く化粧する。

よ 好いお客は後から。

た 竹のことは竹に習へ。

れ 零點か、百點か。

そ 空飛ぶ鳥も土を忘れず。

つ つんぽに内證話。

ね 猫には手毬。

な なんにも知らない馬鹿、

何もかも知つてゐる馬鹿。

ら 蠟燭は靜に燃え。

む 胸をひらけ。

う 瓜は四つにも、輪にも切られる。

ゐ 猪の尻もちつき。